展勝地風土記

Vol.23

平成30年4月27日

展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課☎72－8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会で、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。次回は平成30年7月27日に発行します。

「展勝地異聞」

後藤 玄伸（げんしん）

展勝地異聞

「さくらは歩いて此処（ここ）まで来たのっす」そう言って、故熊谷明彦氏は笑った。「ハア？（歩いて此処まで来たのは、熊谷さん…）」と困惑する。テーブルの向こうには静かに笑う館の主、故藤原八弥（はちや）氏と故藤原博行氏がいた。時は今から四十年程前、所は私設藤原美術館。展勝の花神が奏でた卯月一夜の夢物語。

「さくらは歩いて此処まで来たのっす。気候や地勢、住みやすい風土を求めて…」満開の夜桜とお神酒が桜の花神の舌の回りを滑らかにした。「さくらの原産地はヒマラヤで、そこから中国大陸・朝鮮半島を経て東へ東へと約6千キロ、幾百万年の歳月。『いつかはきっと安住の地で、自分を愛でてくれる二本足の動物と出会える筈だ』そんな事を夢見ながら歩いて来たのっす」歩行桜の謎が解け、極東の国で現実となった桜の夢を知る。

1921年開園の展勝地。間もなく白寿を迎え、あちこち切り刻まれた老木も、その当時は初老の大木の趣があった。桜の回廊より徒歩1分。藤原八弥画伯が私財を投じて昭和45年に開館した私設藤原美術館は展勝地児童公園に隣接した白亜の建物だった。同時に八弥氏のご子息、博行氏が創設した劇団きたかぜの稽古場兼事務所でもあった。床下高一間半の高床式は北上川の洪水対策の為の空間であったが、同時に劇団にとって貴重な作業場兼資材置き場となる。花見で沸く児童公園を横目に5月の連休まで、そこは〝子どもの日〟のイベント準備の作業場所となる。4月、桜満開とはいえ夜は冷える。寒さに耐えかねて美術館の階段を駆け上る。

「桜並木は簪（かんざし）なのっす。桜の回廊は天地の華の入口なのっす」熊谷氏が杯を傾けると、八弥氏が「展勝地の絶景は陣ヶ丘からの眺め。展勝地絶景の極は国見山山頂からの眺望」と笑った。博行氏より「…解るか」と問われ、私は笑いながら床下の作業に戻った。正直、良く解らなかった。やがて、良く解らない自分に腹が立ってきた。この辺の公用語『ゴシェッパラゲダ』のである。

勢いは怖い。その晩、陣ヶ丘に一人向かう事を決意した。目にした驚愕の光景は、驚くべき眺望ではなく

当時の藤原美術館(1980年撮影)

（夜だから当然）、狐が化けたお姉さんでも足の無い青白い顔のお化けでもなく、足元のふらつく赤ら顔の酔っ払いのオジサンだった。赤の他人を後部座席に乗せ、あれこれ聴いて迷走1時間30分。『急に後ろから首を絞められたら…』あらぬ妄想に怯えながら、自宅まで送りとどけた時は日付が変わっていた。夜、突然出くわして一番怖いのは生きた人間だと理解した瞬間である。

閑話休題。当時の花神たちの言葉の記憶は明確では無い。よって前述の言葉の再現性も甚だ怪しい。けれども…何かが残っている。

形を変えても40年も自分の中に残っているのだから、きっと大切な事を伝えられたのだと思う。そう思えたのは、その後、博行氏の演劇活動に参加できたおかげだ。

劇団きたかぜを創設、年間１５０回を超える巡回公演で岩手と東北を駆け回った博行氏は、子どもたちに向けたその上演作品全てを創作・演出した。

１９７８年3月19日、北上市民会館で第1回北上市民劇場『白鷺（しらさぎ）の灯～灯籠流しのはじまり～』が上演された。作・演出を博行氏が手掛け、川岸・立花・国見山が主な場面となる物語の終盤、白鷺の化身〝サキ〟から託された灯籠を子どもたちが川面に流す。劇中の重要な小道具であった博行氏デザインの灯籠は、〝北上みちのく芸能まつり〟の梵燈の原型となった。物語の想いと願いは今に繋がっている。祭り初日、国見山山頂で採火された歴史の灯は梵燈に採火（かがりび）され山を下る。鬼剣舞大群舞の篝火の炎となり、最終日、トロッコに乗って北上川の流れに身を委ね星になる。

２００４年2月8日、さくらホールで第27回北上市民劇場『山河　花満ちて～展勝の時空を駆け抜けた人びと～』が上演された。さくらホールでの第一回目の市民劇場は、２００２年発行の展勝地80年記念誌『山河　花満ちて』を元に劇団きたかぜに所属した三浦勝氏が脚色した。カーテンコールで満員の観客が桜色のパンフレットを掲げ、舞台を称えてくれた。まるで客席に満開の桜が咲いたように。

瞬間、ふと思った。劇場に何百何千の人々が集う。満開の桜の元に人が集う。共通するのは『日常に無い事』を楽しむ〝ハレ〟の感覚なのだろうと。だから、劇場に来るも花見に行くも大差は無く、それで良いような気がした。〝さくらホール〟此処も人の想いが創った北上市民会館の継承地。

『さくらホール絶景の極は大ホール舞台からの眺望』と、不意に博行氏の声『良い華観（はなみ）の場所が出来た』…いや、そう聞こえたような気がした。

改めて想う。きらびやかな桜の簪は、前世と現世と後世を繋ぐ天地の華の入口なのだと。

第１回北上市民劇場のチケット

筆者プロフィル

後藤　玄伸

昭和35年　口内町生まれ。
小学生の時に北上の児童文化運動ボランティアサークル『虹の会』の活動に参加。故藤原博行氏と出会う。活動に惹（ひ）かれ、中学生の頃から同会のボランティアメンバーとなる。その後『劇団きたかぜ』にアマチュアとして参加。
第25回北上市民劇場『白鷺の灯』(第1回北上市民劇場『白鷺の灯』作・演出 藤原博行氏の再演)・第27回北上市民劇場『山河 花満ちて』演出
岩手県立北上翔南高等学校実習教諭。